

最近三十年における韓国女性詩に関する概説的考察

— 現代東アジア女性文学表現史論の一環として (一) ① —

蘭 明

実践女子大学人間社会学部

最近三十年、人間社会全体構造の大変動に伴い、女性表現者たちは豊かな言説を通して、「女」とはどのような存在なのかという根元的問いへの思索を深めて来た。中でも、聴覚と視覚を動員する音楽性とオブジェ的造形性とを持ち合わせて、女性たちの社会的立場と意識の変化を表象する「女性詩」にとりわけ目が惹かれる。換言すれば女性表現者らはどのように男性中心の既成制度と言説の堅固な城壁を崩しにかかったのか、女たちが求めている「平等」と「快樂」の理想郷はどのようなものなのかを読み取るには、女性詩はインパクトで格好なテキストではないかと考えられる。

本稿はこの三十年来の女性事情と女性文学表現事情を女性詩から読むための基礎作業の一環として、韓国女性詩の生成発展と変容について概説的に考察することを主旨とする。内容構成は以下のとおり二部からなる。一「女性詩」とはなにか、その概念の形成をめぐる論争の実態を整理しながら概説する。二「女性詩」の発展の軌跡と変容を象徴する「母と娘」の関係の再構築に焦点を当て、女性詩人らが遭遇したジレンマ、破壊と回復の二重的反復実験の位相を作品群から読み解く。狙いは言語上の壁などの原因から日本だけでなく国際的に見ても、まだ関心度が低い韓国または東アジア女性文学表現史的研究の地平を拓くことである。

I 「女性詩」とは：概念の誕生と定義の内実ならびに論理的ジレンマ

いうまでもなく、韓国においても日本と同様に女性が新体詩を書き始めてからすでに100年近くの歴史を有する。本稿で言う「女性詩」は広い意味での「女性が書いた詩」ではなく、1960年代のフェミニズム運動を思想的背景とする女性の主体意識の形成の表象としての、女性意識を主体とする詩人とその作品群、具体的には1980年代以後形成されたものを意味する。

しかし、女性表現史叙述において、わずか30年しかない詩的実践を表現する概念として、「女性詩」とはまだ定義中にあり、韓国の場合も例外ではない。例えば韓国の女性詩の中核的存在とも言える盧恵京が韓国の「女性詩に関する議論」は「現在進行形である」と明言している^②。未完で混沌たる現象であるゆえに全体像を把握するに困難があるが、ここでは、できるだけその定義をめぐって展開された諸説、ならびにこれまで韓国の「女性詩」の概念が如何なる形成の過程

を辿ってきたのか、女性表現者にとって「女性詩」の契機と哲理は何であろうかを、簡潔に整理してみる。

I-1 定義

「女性詩」言説における代表的な論客の一人盧恵京によれば、韓国女性文学史においても、また「女性詩」という概念の誕生においても、1987年は非常に重要な意味を持っている。なぜならばこの年に二つの大きな出来事があったからである。

一つは『韓国女性文学研究会』が鄭瑛子を中心として釜山大学にて立ち上げられたことであり、これを契機に、性別身分に対する自覚意識の印として、「女流」という表現が「女性」に取り替えられるようになった；もう一つはその一年前に創刊され、のちにとりわけ1990年代において女性言説の重要な陣地となった『もう一つの文化』第三号には「女性解放文学特集」が組まれたことである。「女性文学」という表現はそれ以後迅速に広がって行った。ただし、詩の分野では「女性」と「女流」はしばらく共存していて、小説の分野よりだいぶ遅れ、1990年代に入ってから、やっと「女性詩」という表現が表層に露出し始め、そして同じころから女性文学より独立するジャンルにすべきとした声といかに定義すべきかをめぐり議論が盛んになり、女性詩批評テキストの重要な論題となった。

多くの女性詩人がこの論議に参加したが、定義の形成に大きく貢献したのは金正蘭（キム・ジョンラン）と金恵順（キム・ヘスン）であったようだ。

女流という用語を意識的に女性という用語で取り替えた時期は大体1991年から1992年の間と見られる。女性解放の次元で女性文学一般論の中に扱われた詩を、その自らの論理を付与し再定義しようとする作業の始まりは、1991年金正蘭の「Stabat Mater. 立っている聖母たち」だと考えられる。金正蘭はこの文章の中で「女流詩」と「女性詩」を区別して、「女性詩」の系譜を構築する作業に取り掛かった。

「女性詩」の作業が美的近代性の獲得に関連していることだと指摘したことで、その後の女性詩論議に重要な着眼点を提供した。まもなく1992年金恵順は「フェミニズムと女性詩」という文章で女流詩と区別される女性詩の特質を差異の観点から記述することにより、女性詩という用語をジャンルの概念として規定した③。

このように、金正蘭と金恵順両氏は男性中心の言説により「女性的なものに規定されている資質」「男性により他者化された女性のイメージ」という範囲を撃破し、彼女らによる「女性的資質を劣等なものとして規定せず」、その「美的自律性」から把握すべきという指摘は、「その後の女性詩概念の確立のための土台になった」と考えられる④。

以上、韓国の「女性詩」という概念の初期的形成の流れの一部を概略的に確認したが、ここからはひきつづき盧恵京が提示した手がかりに沿いながら、盧本人も含むその後に論議に貢献した諸家の重要な視座と主張を整理する。

1-1-1 歴史主義的立場に立つ盧恵京（ノ・ヘイギョン）

盧恵京は先に触れた金正蘭の立場と極めて近い、いわば二人は歴史主義的立場の双壁と言えるが、「女性詩」の概念規定について最も論理的に叙述していたのが盧恵京である。彼女の「論議におけるアンチフェミニズムの危険について」と「この時代の女性詩の悩みとは」⑥は「女性詩」の定義をめぐる論議における非常に重要な文献と言える。彼女はその中で「女性詩」を次のように定義している。

1 範疇と課題。「女性詩はひとつの運動である。詩と歴史の範疇に帰する」。「女性詩は多様多元的女権主義的運動の性質を内包する一方、より広い意味における文学的自律性の文学運動を求め」。「女性詩がいう女性とは女性内面の差異と分離を積極的に認識することによる産物であり、生物学的標示とはいえない」。「女性詩は女性自身の身分」を問題とする。

2 契機。「女性詩は政治性文脈の女権主義的“女性”と文学的論議の前衛的詩との出会いであり、よって1990年代文学の新しい形と成果が生み出されている。」

3 戦略的手段。この表現を使う目的は「女性特有な経験を二流から脱出させ、最も重要で、深い意味の過程にすすむ前のしばらく」の猶予である。

盧恵京の以上の主張の裏には彼女の憂慮があった。

1 「女性による女性帰属と他者化」問題、男性対女性の問題以上に、「女性がまさに女性自身の敵になる今の状況」を変えなければならない。

2 現実として、男性論者においては「女流詩という言葉が差別的だという認識をもっているものの、根本的に“女性”という言葉の持つ範囲は従来の“女流”文学より受け継いだもので、生物学的に女性でありながら、文化的には女流である詩人たちが女性詩人であって、あるいは、生物学的には女性であるが、文学的には男性である女性詩人たちのことは、そのまま詩人と呼ばなければならないという、極めて論争の余地がある観点」が存在する。「女性詩が包括している“女性”という表示は、生物学的範疇ではなく文学的範疇であるということの一部現わしたという点における意義」がみとめられるべきだが、「これは女性という表示が文学的に特化されなければならないとするフェミニズムの要求を表面的ばかり認識されていた結果だ」。

総じてみれば、彼女が考えている「女性詩」は政治と芸術の出会いを契機として生まれ、社会的運動としての政治歴史的な性格と文学的性質を同時に内包する。これは彼女が言う文学的「広い意味での文学自律性」であろうが、文学そのものに配慮しながらも出発点から実践的で、文学の政治的な参加を本質としているフェミニズムを忠実に実行することが彼女の根幹にあった。「長いあいだ詩の領域における一般的に認識されている“女流詩”との差異化の過程においてこそ、詩と女性性の考察を深めることができるゆえ、女性詩は文学論争を提供する核心的な運動」となっている、と「女性詩」という概念の策略的性格を強く意識している彼女にとって、女性詩は女性文学にとどまらずに、文学全般におけるフェミニズムの浸透を図ろうとする第一義の行動的願望のテキストであるのがあきらかであろう。

しかし、生命主義的立場をとる鄭グッベルと金勝熙に対する彼女の批判的態度からもよくわかるように、彼女の主張に一つの間隙が露呈している。身体的性質に創作の源泉を求めると社会的現実が付与された「身体的現実」としての歴史との対立である。彼女の言葉を借りていえば、彼女は生物学的身体と歴史社会的身体という二つの身体の間で沈黙しているのである。

1-1-2 生命主義的視座をもつ鄭グッベル（ゾン・グッベル）と金勝熙（キム・ソンヒ）

方法的には歴史的視座をもち、実践的には政治的歴史批判に直接参加する盧恵京の立場と策略は韓国女性詩の主流的存在であることにおそらく間違いがないが、いっぽう、女性詩を支えているもう一つのサイドとして、先に少々触れた生命主義的視座をもつ鄭グッベルと金勝熙らを取りあげなければならない。

鄭グッベルはこれからの韓国女性詩の貴重な資源になるだろうと思われる多くのテキストを作り出している。その豊富な創作体験を踏まえて、彼女は「女性性の全体性、活路を探す」⑥において女性生命を源泉とすべく「女性性の自律性」論理を基盤とする女性詩の概念を提示した。しかし、彼女にみられる詩による政治的参加の立場と一歩距離を置く姿勢に抵抗を感じたかのように、先に挙げていた盧恵京は彼女が「内在的な女性想像力」と女性言語の「差異性」を発見したが、女性の資質を絶対化しており、韓国社会における女性の困窮な現実を直視していない。現実における女性が受けている抑圧に「沈黙」を保つ態度を取っていると批判している。

女性の身体的意義に視座をおくという鄭の立場に比較的近いのは「子宮の詩」という表現を広げた金勝熙である。ただし彼女がいう「身体」は明らかに鄭より「政治的社会的」含みが大きい。彼女は 2001 年に『男たちは分かっている』⑦という題名の女性詩集を編集（1970 年代以後の作品を 44 編収録）し、「70 年代以後女性主義的主体意識のもと、モダン/ポストモダン主義的技法により創作された詩のテキスト」を基準と目標にした、と自ら解釈する。序言「女性は何故こんなにも狂気とエロスに充満しているのか」の一部を抜粋してみよう。

女性文学は少数の文学。

女性文学は逃げるラインを探す文学。

女性文学は父の名前に穴をあける文学。

穴をあけてから縫い付ける二重性の文学。

女性文学は家長制度から押し付けられた鏡を拒絶する文学。

(略)

ときにはよいおっぱいの文学

ときには悪いおっぱいの文学

再生産のための子宮の文学

自己快楽の Clitoris の文学

墜胎の文学

戦争の文学

逃げながら生き続ける根茎 (Rhizome, 匍匐性茎) の文学

夜間に飛行する文学
(略)

このような金勝熙の考えには、女性文学の特殊性は「生物学的意義」にあるのではなく、「植民地的文学」であることにあり、というシルヴィア・プラスの主張が濃厚に投影されているのは明らかである⑧。詩集の表紙に真っ赤の下着の構図が仕込まれているように、女性の身体性に注目しながら、身体性の特殊を理由に周縁化されるジレンマを超越しようとした彼女の論理も戦略も明瞭的であった。「女性的主体」(Female Subject) から「女性主義的主体」(Feminist Subject) への意識転換は女性詩の「現代性」的特質の出発点であり、家父長社会に押し付けられた女性政治性及び幻想を受身的に耐えるのではなく、女性の虚構と世界、我と差異、自我意識の分裂といったような「鏡と象徴秩序の虚構性を見破ることが女性文学 (Feminine Literature) と女性主義文学 (feminist literature) 的差異である」と彼女は強く訴えている⑨。

しかし、「生物学的性質と母性性を過分に強調」しているのも、方法的に広げていくには難しいと彼女も同じ盧恵京から一撃を受ける。事實は盧が憂慮していたとおり、1930年代を代表するモダニスト李箱の研究者でもある彼女らしい女性詩の「現代性」に対する執着より、「子宮の詩人」というイメージが彼女にとって本意であるが定着してしまったのであった。

1-1-3 金恵順 (キム・ヘスン) の「両性共有」論

金恵順は「フェミニズムと女性詩」⑩という重要な論文において、女性が特有する文法、文体、身体性を重視すべきと主張するいっぽう、「男性詩と女性詩を区別するような決まった基準は存在しない」、詩人の本質から言えば「異性の声を出すことが可能である」、女性詩という主張は「女権主義的観点は一種の方法であるというより、むしろ一つの可能性である」、「男性的言説を破壊する道具であるというより、むしろ男性言語と男性世界を窺ける可能性である」、文学の天才はみな「二種の性器」をもっており、詩人は自分自身と交配する、と独特な両性共有論を提示した。

さらに彼女は『女性が書くということは』⑪において、女性詩の創造的営為を「妊娠と出産」に喩えて、「詩は私の胎中の母性を覚まして出産する行為」であると、詩は「女性の領域である」という考えを表象しようとした。いくつかを抜粋してみよう。

「女は質問を受けた。‘どうして文学をするのか’と。その質問は彼女の耳には‘どうして詩をするのか’というように聞こえた。何故ならば敘事ジャンルに対抗して、敘情ジャンルを‘する’運命を持って生れた女が自分だと思ってきたからである。」

「文化的象徴が刻まれて演出される舞台になった女の身体、意味付与を通じて剥製になってしまった女の身体、彼女は意味がいっぱい刻まれた身体になるのを拒否した。」「彼女は自分の皮に失望してたまらなかった。彼女は絶えずその皮、仮面を手術と扮装パフォーマンスで変える。」

「私には神話時代から綿綿として続けてきた話と詩を通じて意味を与えたお父さんたちから逃げてお前を愛すればするほどより一層私の体の中から出たくてやきもきする彼女がいる。」

「女は詩を書くのではなく彼女の身体が‘詩をする’のだ。‘詩’をするのは私ではない。こ

の皮である、この外部的に関係を結ぶ自我である。」

このように金恵順は女性書き手の欲望の代言者として、身体論を始め、女性言説の枠を拡張するように、女性詩に自然的、運命的営為という論理を与えようとしていた。そこには歴史的古い文脈との親近性疑惑を一掃したいと同時に、対極にある男性書き手との差異性を図りながらもまた相対化しようという折衷的意図があったのがあきらかである。

1-1-4 周辺状況としての金容姫（キム・ヨンヒ）と「娼婦詩人論争」

周辺環境認識の補助資料として、「女性詩」議論の延長線上に金容姫により引き起こされた「娼婦詩人論争」をここに触れておきたい。

2004年文学評論家金容姫が『ペネロペの布のかけはぎ—いまの時代の女性詩人』^⑧という一冊の評論集を出版し、本のなかで女性詩人を「アマゾンの女性」、「サディズム的女性」「母性的女性」「構図自適女性」「娼婦的女性」「夢想的女性」などと六つに分類した。「アマゾンの女性は性的欲望と母性をあきらめることによりもっと大きい自我を獲得した女性」であり、娼婦的女性は「男性と契約的取引の関係の中に置かれていながらも男性から独立的であり、男性を嫌悪する二重的複合的女性」というのである。さらに、このような分類の目的については「既存する男性的視線によって母性と娼婦に分けられた両極端的な女性のイメージを壊して、女性性の多様性を立てる」ためである。「娼婦」は男性を通じて経済的必要を満たそうと思いつつも男性家父長的支配論理に対する全面的抵抗を象徴する存在。「娼婦」という言葉の否定的含みで自由になるということは果てしなく言葉を抱きしめてお父さん/言語と競う詩的対決がなくては不可能だ」と彼女が説明している^⑨。

しかし、この分類法は新しくて果敢なものであろうが、類型化を試みたのが問題になり、さらに姜信愛ら一部「娼婦的詩人」と名付けられた女性詩人から強い反発を招き、評論の暴力、女性同士の暴力だと指摘され、しばしの間になぎやかな論争になっていたのであった。このような「性の倫理」に関わる論議論難は1990年代急激に発展したフェミニズムを依拠に女性詩の分野で男性的言語を解体する語法を評価されながらも、書き手の側でさえ言葉のようにたやすい事ではない現実を見せつけられたのであった。

1-2 考察：日本と中国の一比較

ここで視線を近隣に移って、日本と中国の場合をちょっとのぞいてみることにする。

1-2-1 日本の場合

日本の女性詩の根拠地とされる『ラ・メール』が創刊したのは1983年7月、「女性詩年表」を作ったのは1991年1月、詩壇を左右する权威的『現代詩手帖』に「特集 女性詩最前線」を組んだのは同じ1991年（9月号）のことであった^⑩。特集のトップを飾る座談会「女性詩はこう変わった」において「女性詩」の経緯が整理されている。主力論者の新井豊美は、「女流」という言葉は

女の作家を閉じこめる「ラーゲリのようなもの」で、そこにはもはや何も存在しない、という富岡多恵子の言葉を思い起こしながら、「女性には誰でも「女性詩」という言い方には抵抗がある」、「女流が女性という呼び方にかわっても、やはり女性をとじこめる、差別とまでは言いませんけど、区別ではあると思います。でも、一方で、「女性詩」という言い方は現在かなり定着してきた感じで、それはそれで何かのかたちで必然性があることだ」、「女性詩」という言葉は、いわれている以上のなかに実体というか意味があるんじゃないか、現実として既成枠で抑え切れない新しい女性詩人の出現が「女性詩」と「言わせた」と、かなり慎重さと、ためらいを見せている⑤。ちなみに女性詩の正真正銘の旗手、「カナコを殺し」を代表とする衝撃的な創作で女性詩を既成事実として成立させた伊藤比呂美は「女性詩」の称呼には消極的だった(『ラ・メール』創刊号)。

ところで、新井豊美は最近微妙な変化をみせはじめている。2006年戦後60年〈現代詩〉再考座談会「歴史のなかの現在形」において「女性詩という概念は広がっていて、大文字の観念の言葉でない、生きていく小さな言葉、身体性をもつ言葉として考えていくと、吉増さんのいう隙間を縫う言葉とか、アジアとかいままで見えなかった国々と繋がって行くような意味を持つ言葉というふうな概念にまで広がって行くんじゃないか。」というような曖昧な表現に日本女性詩的事情を屈託しているのであろうが、「女性詩」を具体的「身体性」と戦略的方法論として性格規定しようとする潜在的願望が現れていたのである⑥。

いっぽう、「女性詩」の草分け格にあたる白石かずこは日本の「女性詩」の歴史の起点を1960年代に見ている。

「七〇年代に入ってからフェミニズムも世界的な潮流となった。するとわれもわれもとこれに飛びつく、という時代になり、女が子宮について書き、性交について書く。しかし、これが女性詩のはじまりではない。その前、六〇年代から七〇年代にかけてこそ、女性詩が解放される前の受難と闘争の季節、踏絵の時代であった。男根詩人という不幸にも名誉ある呼び方で、その言葉だけがポルノチックにとりあげられて、あげつらわれたその時代こそタブーの解禁をまだまだ遠くにして、タブーを破ろうとした最初の季節だったのである。⑦」フェミニズムの政治的性格を鮮明に打ち出すところは、韓国の盧恵京の姿勢に、身体性を切り口にする戦略は金勝熙の視座に近似する観が捉えられる。しかし、日本の女性詩の全体的状況としては、豊富な作品に比べて定義などの議論については余り熱心ではないかのようであった。もちろん韓国や中国のように女性詩の定義をテーマに、情熱を注ぐ研究などはまだ見当たらず、概念又は定義として成立してはおらず、「表現」に止まっているというほうが妥当かもしれない。

1-2-2 中国の場合

中国では、「女性詩」という表現は、1986年翟永明らの女性詩集を評する際に評論家唐曉渡が使ったところから始まったと、一般的に考えられている⑧。「女性詩」の称呼に関して、熱い議論を展開されたのは北京会議を背景とする1990年代中ごろのことである。代表的な論客戴錦華と周瓚の見解を見てみよう。

戴錦華は「女性詩とは、非常に歴史的な概念であると思う。この概念はまず長い歴史により構

成された現実直面するのである。このような概念を提起する前提は、実は、女性は弱勢群体であるという事実を指摘することにある。弱勢とは、広義的において、権利がないだけでなく、女性詩人の成果は男性詩人ほど高くないことも含まれているかもしれない。わたしたちは女性詩人を一つの集合とし、男性詩人もまた別に一つの集合とするのは、特別の空間を開くためである。」と女性詩の不本意の現状を見据えながら、その歴史的方法的性格ならびに意図するものを規定しようとしている⑩。

周瓚は翟永明といっしょに女性詩代表誌『翼』を主宰しており、詩人でありまた研究者でもある。彼女はこう言っている。「私にとっては、“女性詩”とは集合的概念であり、ただ女性の集合ではなく、詩の集合ではなく、描写と叙述のことばの集合でもある。」「わたしたちが研究において“女性詩”という名称を使い続けている動因は、歴史と現実状況に対する認識と反抗にあり、性別意識が前提としてあり、当然このような性別意識は最も強烈に女性詩人らにいち早く感知されていた」と。「言葉」に目をおきながらも、「反抗」という大義を重んずる点で戴錦華の見解と基本的に通じており、女性詩の歴史的現実に対する批判的性格について明白な自覚をもっていた⑪。そのほかに、女性詩を単なる女性性別本体論への回帰と解釈し、女性の現実的経験と女性意識の批判性を見落としていたと、文学批評界の誤認を指摘する声も女性詩人や評論家などから聞こえてくるが、反対に、女性詩という称呼そのものに実際傍流のニュアンスがあり、いまさら「女」を売る必要は何もないと、この表現にあまり感心しない女性詩人もいる⑫。

このように、関係者のあいだで女性詩の概念に関する議論は韓国同様未だに進行形という状態にある。女性を「弱者の集団」であるという認識を全面的に押し出すところから中国の女性の代弁者たちの立場は、女性詩を歴史的範疇と限定する韓国の盧恵京及び金勝熙の立場と近似しており、また全体的においても、日本とは異って、中国と韓国の親和性が明瞭である。ただし韓国の女性詩人ほど中国の女性詩人らは自信がもてないようであり、前文に触れたようにその言論は不安が漂っている。これは近現代の政治的風土の相異など現実的要素が関わっていることが考えられよう。

II 作品から見る発展の軌跡と変容—「娘と母」の関係図を中心に

「女性詩」という概念の内包と外延をめぐる定義の形成ならびに周辺事情を辿ってみた。政治的に国家に管理され、男性支配の言説に周縁化されてきた「身体と性」の両義性という巨大な困難を前にして、あえて政治的立場論か、それとも物質的女性的身体を源泉とする経験論か、という女性表現者たちが置かれている厳しい現実が浮き上がっている。

ところが、いっぽうの創作実験の面においては、論理的混沌と困惑とはほとんど関係なく、いやむしろ格好な材になっているようであった。多くの女性詩人は1980年代の現場の告発から身分の拒否、さらに90年代の母性・身体破壊と快復と、矛盾する現前の困窮と脱出する欲望とをそのまま詩的想像力に転化し、作品に構築させていったのであった。しかし、紙幅の都合があり、ここからはこの三十年を代表する詩人表現者の作品を「娘と母」の関係図を中心に、いわば女と女の関係に焦点をしばって考察を行なうことにする。

II-1 女性詩の史的発展の軌跡

本題に入る前に韓国現代女性詩前史を含む「女性詩」の軌跡の概説をしておこう。

韓国現代女性詩史の一般的叙述において、必ず草分け的な存在として三人の女性が語られる。1917年『少年』に「疑心する少女」を発表した金明淳、1920年代初期梨花学堂（現梨花大学の前身）から創刊された『新女子』の中心金元周、女性運動の起爆剤となった新体詩「ノラ」を書いた羅蕙錫である。韓国の女性運動は「近代化」または「開化」運動の一環であった。東京に留学していた女子学生でもあった彼女たちの活躍により、1920年代は「迷信打破、自由恋愛」を高く掲げた主題は大衆に支持された。彼女たちのあとを継承し、1930年代の芸術至上主義とプロレタリア文学の間で知的詩の技法を磨いたのは、いわゆる「四傑」盧天命、毛允淑、洪允淑、金南祚であって、1960年代あたりまで長いあいだ詩壇を支えていた。とくに盧天命の伝統的抒情と前衛絵画的な手法により、植民地下の朝鮮民族の精神の表象「鹿」をモチーフにした詩などは、女性詩の源泉とされ、1960年代末から現れた姜恩喬に息を受け継がれていった。姜恩喬は1960年代国内恐ろしい政治状況（四・一九学生革命、光州事件など）の体験を持っており、七十年代の韓国の高成長と平行した、知識階層を主力とする社会的運動の問題意識を視野に抑えながら、民族的分裂と女性的辺縁化処理された歴史の二重構造を「貧者日記」「私たちは水となって」などで鋭く表現している。1970年代から注目されるようになる以来、1980年代以後30年間の女性詩のスタートラインのような存在として今日も注目されている。

このような広い意味で捉える女性詩の百年史を、作品テキストと韓国研究者の研究成果を踏まえて、テーマ的に次のように五つの時期に区分することができる。

第1期（1910年代～1945年）の特徴は直接抒情を方法とする民族意識と女性意識の覚醒が混生する。第2期（解放後～1960年代）は存在論の浸透と表現の多様化にともなう伝統の動揺と内面化。第3期（1970年代～1990年代）前半1970～1980年代のテーマは暴力性の現実の発見と既成文法の破壊；母性の両義性（賛美と拒絶）、思考する身体。後半1990年代の女性史的叙事と女の日常の再発見；90年代末の他者性の転覆と無性志向^②。

既成の研究法のように年代別に切り分けて論じるのがまだ有効なのか疑問もあるが、ここではあくまでも整理上の手がかりとしての提示である。

II-2 最近30年の女性詩にみる「母」と「娘」の関係の再構築

いよいよ作品の部に入ろう。

1980年代以後三十年来の女性詩は、多くのテーマと取り組んで来たが、身体との葛藤を材に、既成秩序の解体と女性意識の分裂を表現するのが主流であった。1990年代に入ると、男性的視線に付与された価値たとえば肉体と性、愛の意味を一層激しい表現で徹底的に転覆する。中には自虐的な他者化された肉体殺し、性の自主権を獲得傾向もみられるほどである。いっぽう、相対的に新しい生命観と身体性を認識しようとするのが最近の傾向の一つである^②。

本稿は、このような鮮明な過激的な表象を視野におさえながら、女性詩のもう一つの重要なテーマである女性共同体意識の変容を読んでいきたい。女と男の関係からではなく、女と女、「娘」と

「母」の関係の変容に注目したい。「縦の歴史」としての「母の発見」とそこからの脱出、そして横の関係として快復する、という文脈をやや大雑把に分けて捉えてみる。

II-2-1 高静熙（コウ・ソンヒ）と金勝熙（キム・ソンヒ）：大河としての「母」のイメージ

1980年代における思想的啓蒙の旗手として女性史を語りなおすために立ち上がった女性詩人は高静熙、そして金勝熙であり、娘から母へ、母から娘へと呼び掛け合うような作品により、女性共同体の意識喚起に大きな力になったのである。まずは高静熙の「お母さん恋歌」をみよう。

私が自分自身に頭をあげることができない時
声低く呼んでみる。 お母さん
くずれるさびしさ寝返って
夜明けに呼んでみる。 お母さん
(略)
天地にいっぱい月明りが揺れる時
黄土原野に向かって呼んでみる。 お母さん
この世界の不幸を覆いかぶるお母さん
永久に天地にみつる大河であるお母さん
おお 神様を生んだお母さん^④

「お母さん 私のお母さん」の一部である。もう一つの代表作「母の恋歌」と同じく、「母」をガンジス河に喩えて、「どきどきしなさい/生命の根を呼び出して/生命の脈搏にキスする」(部分)詩句には平塚雷鳥の「元始、女性は太陽であった」の韓国現代版として捉えてもおかしくないかもしれない。同じく1980年代の韓国の「女の語り直し」の出発点におけるテキストのなかに、金勝熙の「母の足」がその代表作の一つと言えよう。

娘よ、見なさい、
母の足は大きいでしょう。
大地の入口のように
屋根の下 大梁のように
母の足は大きいでしょう。
(中略)

履物の中では五つの足指
いや十本の足指が
導火線のように火花を撥ねながら
痛々しく泣いて
ハウハウ 後進国のように踏み付けられて
疲れきった身体でぶらぶら病んでいる一生

(中略)

世の中の娘たちは
空を蹴飛ばす羽を持ったが
世の中の女達は誰も飛ぶことができない
世の中のお母さんは皆善良なのに
世の中の女達は誰も幸せではないね②

詩は六連からなっている。簡潔にいうと、ここには二重に周縁化されている女性の現実が書かれている。一つは「女」として抑圧されていること、もう一つは「後進国の女」として、踏みにじられてきた歴史のことである。韓国の女性詩には「女」の不幸の歴史を、このように、母が娘に語りかける形をとる作品は、ほかにも見られる。たとえば金恵順の「中央博物館 道」と題した作品も、同じく矛先を「歴史」に向けていた。作品は「朝鮮王朝時代館で子供が迷子になった」と書き出して、高麗、新羅、石器時代館へと遡る順に、展示物の中を駆けながら、すべての器たちが壊れた子供に見えて、最後に親子は鉄器時代の「兵士の前で手を取り合う」ことで閉じている。発想から語りの口調までなかなか痛烈であり、辛辣である。

注意すべきなのは、ここに挙げた三人は第一部でみてきた「女性詩」の定義形成の議論に参加し、女性詩の論理的準備の主力的存在でもあった。「母」と「娘」の「不和」が表面化されていなく、女性共同体として書き込まれてきた男性的暴力性の告発に立ち上がるこのような創作営為は、彼女たちにとって、女性主義的女性史観の具現化と言っても問題がないであろう。

II-2-2 崔勝子 (チェ・ソンザ)：「母のお腹」から新しい女の暗示

1980年代においては、実に多くの優れた女性詩人がいた。どうしても省略できない詩人は崔勝子である。

崔勝子の詩は1980年代前半あたりで、女子高生らが、かばんに入れて持ち歩くほどの人気ぶりであった。ここではやはり「母」と「娘」の関係に注目しながら、次の「あらためて誕生するために」を読んでみたい。

お母さんの暗い腹の中で夢を見る/遠い国の太陽の光 透明な悲鳴/しかし いつも踏み付ける父の二本の足が/入って来て 私の体に杭でめりこんで/私は針金に縛られたような眠りから覚めようと暴れてみたが、/父の二つの足裏は 運命のように堅固だった/私は私の血が跳ね上がる銑鉄の液体をもって戦った/眠りの眠りの中でも戦って夢の中でも戦った/手が草取りの鋏になって、腕が鎌になった②

父権を象徴する「父の両足」など、表現として少々図式化の感じがするが、それはさておき、さすがフェミニズムの旗手格的存在らしい作品といえよう。とりわけ「母のお腹の中で」という視角の設定を見落とせない。「自画像」と題した詩の中においても「母さん、わたしは暗闇です」

「お腹の中の赤ちゃんが母の愛を求めるように」と訴えている。そこには、歴史運命を共有する母との連帯感がもちろんあるが、それよりもっと重要なメッセージが託されているのである。つまり母とは違う視点と立場をもった、新しい女の誕生を暗示しているのである。

「自画像」「ある日の朝」など多くの作品のように、視線を原始へ逆送しながら、女性の身体の二重構造から女性の身分確認に彼女は急いでいた。いっぽう彼女の詩の中心軸に据えている暴力的世界像はただ男性中心の家父長的権力に要約されることができない複雑性を含んでいる。

「崔勝子は墮落した世界の転覆と人臭い紐帯感が回復した新しい世界の誕生」のために「崇高な美しさがあふれる愛を断る。代わりに羈束と暴力でごっちゃになった愛、憎悪と悪口が横行する愛、捨てられた愛、絶えず子供を死産する愛」を選択する。「マゾヒストとして「私」の身体を鞭打つように要求し、自ら卑賤になるのを決心する」「しかし崔勝子の詩の脈絡の中では、マゾヒストとしての恥辱とその中に夢見た幻想が、果して世界との仲直りというより大きい価値に到達しているかは懐疑的である。⑩」という指摘におおよそ納得できるが、それはあくまでも彼女の「横の連繋を拒絶する」、という書き手としての戦略的選択とつけ加えておきたい。

II-3 1990年代の幕開け：金正蘭（キム・ジョンラン）と崔泳美（チェ・ヨンミ）

1980年代を、歴史と現実を合体した批評の時代といえ、1990年代は、身体と日常の革命の時代といえるかもしれない。十数年間数多くの表現者が生み出されたが、ここでは「娘」と「母」との新しい関係の可能性を詩的に構図した金正蘭と、学生運動と恋愛の挫折を下敷きに、政治的倫理のように定着した主流的「革命」の文脈を、体でもって破壊した崔泳美をとりあげてみる。

II-3-1 金正蘭：「母」との「断絶」と「仲直り」－1990年代への架け橋

金正蘭は1989年に、80年代の整理と90年代の幕開けを象徴するテキスト「母を捨てる、またはその逆」⑪を発表した。「母と娘」の関係を「否定から和解へ」のための「演習」をリアルにまたファンタスティックに仕上げた作品である。しかし、十章により構成された大変な長編であって、ここでは粗筋だけを紹介しておこう。こんな具合である。

ある日私は母を捨てること、「私は私ではないようにする」ことを考えだして、墓のまえで母を飛び越える夢をみながら「私は母にすまないことなんかまったくくないのだ」と、自分に言い聞かせ、母からの「脱出」を決意した。そして、紫色の悪魔に誘われて「飛ぶ練習をする」。とうとう「豚の顔を持って」月の世界での暮らしを始めるが、「地上」を憧れるようになる。最後は、「空になっていた鳥籠から白い羽が湧き出始める」という光景を目に浮かべ、海辺で復活を果たす。

このように、金正蘭が提示した「母」を拒否するから和解への演習は非常に明快で、少女の物語のようなものであったが、母に付与された歴史、母性を抑圧する現実と、母性と自我アイデンティティの間で分裂する女性意識についての問題提起は、大きな反響を呼んだのである。

1980年代の女性詩は社会的歴史と現実を視座に批評の一翼を担ったと言え、1990年代は身体の歴史の発見の時代。新しい身体の発見により、既成の身体の政治性に攻撃をかけるのである。

金正蘭は「母」と「娘」の関係の再構築の新しい方向を示したとすれば、崔泳美は身体と政治の新しい言語を探っていた。

II-3-2 崔泳美：「革命」と「愛」の廃墟に発見した「身体」

1

革命が始まりもしないうちに、革命が陳腐なものになった
愛が始まりもしないうちに、愛が陳腐なものになった

この二つの文章の間には、何等の論理的な関連もありませんが

2

予言者たちの熱い血で丸々と太った夜、日曜日の大行進のように私も声を出して笑いたいが、チャンネルを回すとピンポンパン。過ぎた夏が字幕とともに偶然流れていき、タバコの煙が喉にひっかかって気管を下りて行かない。

三十を過ぎた彼らは、みなしたたかな顔をして、敵たちも我々のようにくたびれたかなとぶつぶつ言いつづけ、洗って濯ぐべき何か粘ついた現実があるわけでもないのに、洗濯機を一生懸命回してピンポンパン。死体のように疲れる夜が押し寄せる

3

赤いゴム手袋を見れば女は恐くて、ああと、大声を上げようとしても、よく声も出ない一人ぼっちの家、お化けがわっ！ 風が吹いて堂々と入ってきたお化けが、手だけが見える透明人間が、すうっと立ち上がって、血のついた手で首を絞めるようだ

息が切れてぐったり、死にそうだ、何だって？ 別れようだって？ 背中の後ろで一つ二つと、窓がするする閉まる、ベルトがカチャカチャと外される音、ぐったり、しかし決して言葉に直せなかった言葉たち、ぶたないでお願いだからぶつのだけは止めて

盗まれた初恋が、腐り始める臭い、震動した夏の午後、それも時の流れと、記憶を通り越した傷は癒えて堅くなったが、あそこの、あの網戸の外でぶんぶん鳴く蚊のように、今はもう危険なことも無いのに…

ただ、出た汗が引っ込み

ただ、汚れた血たちが、ガチャガチャ言って

—「愛が、革命が、始まりもしないうちに……」(抜粋) ⑳

1990年代の大きな出来事と言えば、崔泳美の詩集『三十、宴は終わった』が、百万部のベストセラーとなり、マスコミの話題を独占したことが上げられよう。崔泳美はいわゆる「638」世代に当たる。つまり1960年代生まれで、1980年代に30代に入るぐらいの世代である。この世代

は独裁政権の下で青春時代を過ごし、多くは学生運動などの挫折を経験している。崔泳美が世間を驚かせたのは、激しいイデオロギーの時代から、急激に経済・商業主導へ転換する時代における脱水症状のような時代感覚を見事に掴んだ上、「性も愛も革命も始まる前にすでに腐っていた」といった、女性として経験した「性」または身体と思想の関係を、詩にしたところであろうか。

朝食の石首魚一匹

つつつきながら、わたしは見た

ついに晒された肉身の秘密

暴かれた五臓六腑、散り散りに砕けた肉片

真実とはこんなものか

一度剥げば骨と肉だけに収集され

あの晩の陰部のように、怖いほど単純になる二人の物語

死んだ魚を裂きながら、わたしは知った

傷も生きているものだけがまとう服

(略)

生きて、跳ねた言葉

生きて、空腹だった体

すべてを失い、私は噛んだ

口の中いっぱいに淀む

ラスト・セックスの思い出

—「ラスト・セックス」(抜粋) ⑩

セックスのことを食事の場面にのせるのは、彼女が好んで使う手法であるが、この作品の続きのように、彼女はまたこう訴えている。「たとえわたしのところで如何なることが発生しても、わたしの両腕と両足は、悪魔のように丈夫だ。」(「あなたへ通じる道を私は知らない」) 明らかに彼女にとっては、身体は方法であり、主題でもある。

男性の暴力的あるいは性的視線を無意識的に踏襲するとか刺激的な性的興味を誘発する、商業的発想に踊らされていると、ソウル大学出身のエリートというコードの反動であろうか、一部の受け手側の反応は愉快ではなかったが、彼女にまっさきに拍手を送ったのは先に触れた崔勝子であった。「彼女の詩は、戦いの記録である」、「彼女が見せた透明な体の光芒」、「毀損された女性の身は不毛の世界を象徴する隠喩である同時にこの世界を治癒することができる唯一の信頼の象徴というのである。女性肉体の主体性を積極肯定し、これを女性の力、新しい創造の衝動として認識しなければならない。」⑩と崔勝子が言う。

崔勝子と崔泳美は世代が違うものの、女性の思想的啓蒙と歴史の叙述に参加するという接点を持っていた。私の身体はそこで毀損され、そこで生き返る。悪魔というほど自信を持ち、真正面から宣戦布告する崔泳美の詩は、崔勝子の女性啓蒙の歴史的抒情の文脈のなかにいる、同時に崔勝子の洗練された観念性を懸命に疎遠し、身体的事实、粗雑にさえ見える表現に、さらにリアルな口語と平俗の文脈につとめることによって、新しい地平の開きに架かったのであった。それは

「娘と母」の視座からではないものの、男性社会そして革命の名義のもとでの暴力に対して立ち上がった女の身体を表象する意味で、次の世代への強いメッセージになったに違いない。

II-3-3 金宣佑（キム・センウ）の「女たちの楽園」

新しい感性の誕生、新しい「女たち」の構築は、やはり1970年代生まれの詩人を待たねばならなかった。崔勝子と崔泳美らが切り開いた男性中心の暴力的世界に抵抗する土壌、それから金正蘭をはじめとする「母」との葛藤・拒否と和解への「演習」時代、1990年代末あたりから1970年代生まれの世代の手により、集大成の観を呈して見せてくれた。その代表的存在のひとり金宣佑である。彼女はこれまでの文脈と違って、他者化された女性意識の分裂を表象するより、女性自身の自足と平和を発見し、「女たちの楽園」を構築する。そこには「母」は「博愛」「人性愛」の記号にされるのではなく、父権の犠牲としてでもない、新生と美の発見の契機として、女性国の一員として描かれている。中心対周縁、都会対辺地、文明対原始といったような構図を故郷の大自然の中に消化してしまうのであった。

彼女の詩の世界は主に三つのテーマから構成されている。

一つは「母殺し」である。まずは微笑みながら彼女は容赦なく「母殺し」を実行する。例えば、「母の自殺 2」の初めの一行はこうなっている。「その日私がお母さんの肉体をかみながら見たことは何だったろうか」、そして、「もうそれ位にして死んでください」と。

もう一つは「女の園」の構築である。いったん「母」との断絶を図ったあと、彼女は「女の園」の構築に取り組んだのである。そこには男たちは立ち入りができない。拒絶でもなく追い払うのでもなく、最初からそこには男はいないのである。「母」の位相と焦点を合わせてみると、二つの特徴が見えてくる。

①身体の内史と運命を共有する「母」。たとえば、「水からなる女」のなかで、「生理日が近付くたびに、海の匂いが感じられる。母の母の母たちの話をわかるようになる」と謳い、さらに女の身体の内史を書き込む生理のイメージと雨乞いの祭典に重ね、民族と宗教との色彩の競い合い、女性の生命の美を力強く造形する。同じ視座をもつ「魚於淵」も故郷の河で沐浴する母と設定され、生理を暗喩する「点々紅点々紅」と表象し、母の身体に魅せられていたのである。ほかにも「私は花をおさめた睡蓮にささやく/閉経だって、母/完経だ、完経！」（「完経」）「寝こんだお母さんの六十六誕生日の日/故郷へ行って小便を受けて上げて」（「来歴」）などがあり、母のからだを媒介に女性の身体的な運命をユーモラスに受け入れる姿勢を見せている。

②平和な姉妹としての「母」。

ナセイはぺんぺん草の私の故郷の方言
うちの母もお婆ちゃんも春姫も私も
ナセイ花が散る前に
季節おりおり草葉を送ってくれる野辺に
遅れないように見に行かなくちゃと焦ることがある

陽炎が咲く丘陵にしゃがんで暖かい小便をしたことがある

うちの母もお婆ちゃんも春姫も私も
そのちっぽけではつつしたすばやさを‘ナシャンイ’と呼んだが
その時のその‘ナシャンイ’は とうてい 書けないのだ

土の中に真っ白な根を垂すように
下に染みこむ発音“ナ”を
けがをしないようにこっそり引きあげながら
日ざしを揺るがすように
空気の中に卵のうをつけてくれるように
“イ”を転がし‘シャン’を渡せるようにする

その“ナシャンイ”
虚空に飛んだ鳥たちの町かど
うちの母とお婆ちゃんと春姫と私が
春の野辺にしゃがんで二つの耳を傾けて聞いた
その小さなざわざわ打つ薄緑色音を
そのジンとする尿気を◎

題名は「ナシャンイ」。春の気配がする故郷の野山で故郷の言葉で語り合いながら、母と祖母と妹と私、女四人が一行に並び小用をする。生命の本来の無邪気の姿、自然との調和のなかで営まれる新しい女の楽園、この構図には、女性の共同体が形成されるまでの歴史がきれいに消されており、現代都市文明と男権社会とを一石二鳥撃沈しようとする詩人の意図が窺われる。

そして金宣佑のもう一つのテーマは社会的暴力への批判である。

精子の数が減っている
という、クスクス、
実験室のピーカーと
胎児たちの頭が解放されるだろう

四〇年の間平均40%の精子が減った
という 最近10年間は年2.6%の減少率
クスッ、私は笑う 2.6%ほど
売春婦たちの家計簿が豊かになるだろう

ただ、原罪ではないことに感謝せよ
化学薬品が体の中に蓄積して起きた副作用だ
というクスッ、君だけ飲んだのかい？

とんでもない平和な終末が来るかも知れない
五大洋六大陸の年寄りどもが集まり
隣り組み会でもするように最後の神前への供え物の息を止めるかも、
受精卵の雲が早く下降してくれるように
幼い人間の泣き声をたった一度でも聞けるように！

肺臓と子宮を持った動物の中で
自分たち同士殺戮し、搾取するのはただ一種類だけだから
甘んじて受けよ 天の門が開き
腐ったヘソの緒が降り下っ腹を刺し抜くだろう

無精子の時代
無受精卵の靈魂たちが
冬のキビの茎を染め
次の 次の 次の年には
赤いキビの花だけ元気に咲くだろう^④

題名の如き、今の「時代」を全射程に捉えている。「男たち」の無様と不始末と不毛を目の前に堪らなく笑い出す女。「肺臓と子宮を持った動物の中で/自分たち同士殺戮し、/搾取するのはただ一種類だけだから/甘んじて受けよ」あたりのように、時事的詩風の底辺には平和を願望する女性的身体と男性的暴力の遭遇があったと語っている。女の楽園の景色から男を追い払った理由はここにあったかもしれない。彼女の最初の詩集に、詩人金正煥が「彼女を新しい感性と歴史性の奇跡とみなさなければならぬ」と少々誇張的な口調で推薦の言葉を寄せていた^④。

II-4 視線をもう一度日本と中国へ

「娘と母」の関係の再構築は、韓国女性詩の主要テーマの一つに過ぎない。「女性文学は女性言語と女性的書き手を通じて自分のアイデンティティを探そうとする努力を多次元で繊細に盛り出している。女性たちは自分に内在した欲望に耳を傾けて周縁である、あるいは他者として認識されて来た自分の姿を真剣にのぞき見ながら、女性を主体として認識する思考を整理している。^⑤」しかし、以上概説したように、「娘と母」の関係の再構築に含む「身体」と「母性」に対する思考は、女性の主体意識の形成の過程の表出として、重要な意味を提示している。「女性詩での母性と存在探求、肉体との不和と仲直り、家出と家回帰、生存と抵抗のための女性の言葉と文などは、皆女性の存在探求と並行するフェミニズム的テーマである。家出と家回帰を繰り返すなか、徐々に生産的な認識として成長し、旋回しながら女性解放と人間化という意識の内面化」を深めて行くのだろうと、韓国の研究者らがみている^⑥。

さて、さらなる具体的な詩人論と作品論を別の機会に譲り、ここにて視線をもう一度日本と中国の女性詩が辿ってきた道程に当ててみよう。たとえば日本の伊藤比呂美（「生む」と「排泄」、または「母」としての「カノコ」との戦争）から片岡直子（快復する「産道」と「曖昧の母音」

の快樂)まで、中国の翟永明が辿ってきた(「私の目は二つの傷口のようにあなた(母)を眺めるから、故郷の黄河を背景に起こされる「ますます美しくなり人を驚かせる」、官能的で、妖艶な母に「わたしたちは」で呼びかける)への道程のように、身体との不和にともなう「母」との不和から「友」「姉妹」として仲直りという「母と娘」の関係の再構築の営みは、さらに暴力(男権批判を超えた視座で捉える「戦争」というもの)への拒否など、ともに近似する展開と局面が見受けられる^⑧。しかし、前文に触れたように、政治、経済など社会への参加と正比例的に、熱い議論が展開されてきた韓国または中国に比べると、日本は余りにも早く相対的にまた多元的に、よく言えば「言葉」へうまく逃避している感がする。日本の女性表現者の状況を思考する意味においても、韓国の女性詩を参照系統として取り上げる意義があるかもしれない。

Ⅲ おわりに

金賢子は文学史において女性文学の成長にふさわしい評価を受けていない現状、とくに韓国の女性詩史の叙述する困難さについて次のように述べている。「(女性詩は)文学史に適切に編入されることができなかったまま既存の文学史とは別途の次元で一つの傍系領域に認識されたりして、疎外された領域として存在して来た。女性詩人たちの自意識と挫折、自由意志と欲望、独立的で主体的な存在としての念願などはその文学的成果と意義に比べてけちな評価しか得られていなく、保守的なくびきを拒否して近代的自我に切実に目覚める女性詩人たちの詩はむしろ‘気違い愚痴’として傍観されて来た。」金賢子氏の訴えは日本と中国の女性詩の境遇についても、そのままはまると言ってよいであろう^⑨。

いっぽう、女性詩人らは行動し続けている。東アジアの視座から見れば、1990年代以来北京会議をきっかけに、三カ国の人的、情動的交流が多くなっている。例を一つ挙げれば、前文に触れた崔泳美『三十、宴が終わった』は、三年前日本語に翻訳され、昨年再版することになったのである。日本の出版界においては、韓国の女性詩人の詩集の再版は前例のないことである。このように形成されつつある東アジアネットワークという視野から女性詩を捉えることで、何かもっと大きな「実体」が見えてくるかもしれない。その必要と可能性が強く感じられる。視覚的聴覚的な優位性が内包されている「詩」という大きな「方法」をはじめ、多ジャンルへの通路も含めて引き続き追跡していきたい。

註

- ①本稿は実践女子学園 TV 講座にての口頭原稿「1980 年代以降の東アジアの女性事情－中国と韓国の女性詩人の声に耳を傾けて」を大幅に書き直したものである。資料を中心に韓国女性詩の文脈を整理、概説するにとどまったが、これはさらに詩人研究ならびに作品研究をすすめていくための準備作業にあたる。文中における韓国語資料及び作品の日本語訳（明記される一部を除き）は主に筆者によるものである。ただし未定稿（人名の当て字など）を含む。あわせて『人間社会学部紀要』第 3 集。2006 年 4 月。拙稿「翟永明及びその周辺にみる「母と娘」の関係の再構築－1980 年代以降の中国女性詩に関する一考察」をご参照いただければ幸いである。
- ②③④⑤「여성시(詩)논의에서의 안티페미니즘적 위험에 대하여」살류쥬 3 号。2001 年。（「女性詩論議におけるアンチフェミニズムの危険について」）盧恵京は詩人、大学教授でありながら、社会活動家でもある。昨年ハンナラ党の朴瑾恵代表から議員選挙の出馬を求められたことで、一時話題になっていた。
- ⑥鄭・グッベル「여성성의 정체성, 그 활로를 찾아서－페미니즘 관점에서 본 에로티즘」『현대시』（『現代詩』）。1994 年 11 月。
- ⑦마음산책（マオムサンチェ）より出版。金勝熙は 1952 年光州生まれ。西江大学英文科卒。詩人であり、モダニスト李箱の研究者でもある。
- ⑧「子宮は/袋をカラカラいわせる 月は/木から漏れて どこへも行く処がない。（中略）/血ばかり流して－/舐めてごらん この暗赤色！/そしてわたしの森」（後略）（「子のない女」）水田宗子『鏡の中の錯乱 シルヴィア・プラス詩選』。静地社。1981 年 9 月。
- ⑨同⑦
- ⑩『또 하나의 문화』제 9 호 1992 년（『もう一つの文化』第 9 号 1992 年）。金恵順は 1955 年慶北生まれ。1979 年ごろから韓国代表的文学陣営の一つ「文学と知性」で活躍。詩集『ある星の地獄』『私たちの陰画』『哀れな愛の機械』『カレンダー工場の工場長 見てください』『一枚の赤い鏡』など数多くある。
- ⑪『문학동네』2000 년봄-겨울호（『文学村』2000 年春・冬号）。
- ⑫『페넬로페의 옷감 짜기－우리 시대의 여성 시인』문학과지성사（文学と知性社）。2004 年 1 月。ペネロペは貞婦の代名詞。A Penelope's Web あるいは The Web of Penelope。ホメロス『オデュッセイ』第 2 巻より。
- ⑬『現代詩』3 月号特集および『叙情メトリック』春の号。
- ⑭思潮社。日本の「女性詩」または「80 年代女性詩ブーム」の仕掛け人は荒川洋治と言われている。彼は伊藤比呂美、井坂洋子ら女性詩人たちに直接電話をし、1984 年詩集を自費出版し、「男子、騒然！」という扇情的なコピーの広告を『現代詩手帖』に出したので、一部で鬨感を買ったとか。
- ⑮新井豊美『「女性詩」事情』（思潮社。1994 年 6 月）などある。
- ⑯「現代詩手帖」2005 年 8 月号。思潮社。
- ⑰「聖なる淫者の季節はじまる－一六〇年代後半から七〇年代にかけて」「るしおる」27。書肆山田。

1996年3月。

- ⑱ 「女性詩歌：从黑夜到白昼—读翟永明的组诗《女人》」（「女性詩：暗夜から白昼へ—翟永明の連作『女人』を読む」）。『詩刊』（『詩刊』）。1987年第2期。「女性詩歌：“誤解小词典”」（「女性詩：“誤解の小辞典”」）『詩林』（『詩林』）2001年第4期。1988年12月四川省における『女子詩報』の創刊は、女性詩人の共同体的出現を意味する。
- ⑲ 戴錦華「女性詩歌：可能的飞翔 关于《翼》的对话」（「女性詩：可能な飛翔 『翼』に関する対話」）。『翼』第3卷。2000年4月。
- ⑳ 「女性詩歌：“誤解小词典”」同⑱。
- ㉑ 翟永明「再谈“黑夜意识”与“女性詩歌”」（「再び“暗夜意識”と“女性詩”について」）陳超編『最新先鋒詩論選』河北教育出版社。2003年5月。
- ㉒ 김현자, 이은정 「한국현대여성문학사-시」 『한국시학연구』 5집（『韓国詩学研究』第5集）2005年5月。ほか『한국여성시학』参照。깊은샘（ギブンシャン）出版。1997年12月。この本は梨花女子大学の김현자, 이은정など四人の研究者による共著である。「既存の女性文学に対する論議が男性中心的視覚の読書で成り立って女性文学に内在した本質を繊細に豊かに読み取れないということが、私たちの研究者たちが初めて共有した問題意識でした」と著者が明言している。
- ㉓ 同⑲。
- ㉔ 同⑲。
- ㉕ 高静熙（1948.1.17-1991.6.9）『지리산의 봄』（『ジリサムの春』）문학과지성사（文学と知性社）。1987。『문학과지성시인선』64（『文学と知性詩人選』64）参照。문학과지성사（文学と知性社）2006年3月。
- ㉖ 金勝熙『달걀 속의 생』（『たまごの中の生』）문학사상사（文学思想社）。1989年6月。
- ㉗ 崔勝子『이 時代의 사랑』（『この時代の愛』）문학과지성사（文学と知性社）。1981年9月。
- ㉘ 嚴景熙「매저키스트의 치욕과 환상—최승자론」（「マゾヒストの恥辱と幻想—崔勝子論」）『빙벽의 언어』（『氷壁の言語』）새움 펴냄（シェウムプネム）。2002年5月。
- ㉙ 「엄마 버리기, 또는 뒤집기」『다시 시작하는나비』문학과지성사（文学と知性社）。1989年12月。
- ㉚ 『三十、宴は終わった』チェ・ヨンミ詩選集 21世紀海外詩人選書 3韓成礼訳による。書肆青樹社。2005年9月。
- ㉛ 同㉚。
- ㉜ 『서른, 잔치는 끝났다』창작과 비평사（創作と批評社）。1994年3月。
- ㉝ 《도화 아래 잠들다》（『桃の花の下で眠る』）창비（チャンビ）。2003年10月。金宣佑は1970年江原道江陵生まれ、1996年『創作と批評』冬の号に「大関嶺昔通った道」などを発表し、詩壇にデビュー。「詩の力」の同人として活動している。挑発的で官能的な表現を戦略的に取りくんだ第一詩集から注目され、イラク戦争を背景に書かれた「咲け！ 石油」で2004年度現代文学賞を受賞。

- ③ 『내 혀가 입 속에 갇혀 있길 거부한다면』 (『私の舌が口の中に閉じこめられるのを拒否したら』) 창작과비평사 (創作と批評社)。2000年2月。
- ③④ 同③。
- ③⑤③⑥ 同②①。
- ③⑦ 『人間社会学部紀要』第3集。2006年4月。拙稿「翟永明及びその周辺にみる「母と娘」の関係の再構築—1980年代以降の中国女性詩に関する一考察」をご参照いただければ幸いである。
- ③⑧ 同②①。

韓国女性文学・女性詩関連参考文献

- 高静熙 「韓国女性文学の流れ」『もう一つの文化』第2号 1986年。
(고정희 「한국여성문학의 흐름」『또 하나의 문화』제2호 1986年)
- 権宅英 「女性批評の昨今」『現代詩思想』1991年春の号。
(권택영 「여성비평의 어제와 오늘」『현대시사상』1991년 봄호)
- 金成礼 「女性の自分陳述の様式と文体の発見のために」『もう一つの文化』第9号 1992年。
(김성례 「여성의 자기 진술의 양식과 문체의 발견을 위하여」『또 하나의 문화』제9호 1992年)
- 金英美 吳世銀 「女性詩の新しい地平のために」『詩と社会』1994年春号。
(김영미, 오세은 「여성시의 새로운 지평을 위하여」『시와 사회』1994년 봄호)
- 金玉順 ほか 『韓国フェミニズム詩学のメトリック』동화書籍 1996年。
(김옥순 외 『한국 페미니즘의 시학』동화서적 1996년)
- 金勝熙 「象徴秩序に挑戦する女性の声その転覆の戦略」『女性文学研究』第4号 2000年。
(김승희 「상징질서에 도전하는 여성의 목소리, 그 전복의 전략들」『여성문학연구』제4호 2000年)
- 金正蘭 「Stabat Mater、立っている聖母たち」『文学精神』1991年9月号。
(김정란 「Stabat Mater、서 있는 성모들」『문학정신』1991년 9월호)
- 金正蘭 「悲慘の経験を越える単性生殖」『21世紀文学と言は)何か』民音社 1999年。
(「비참의 경험을 넘어서는 단성생식」『21세기 문학이란 무엇인가』민음사 1999)
- 金芝郷 『韓国現代女性詩人研究』형설出版社 1993年。
(김지향 『한국현대여성시인연구』형설출판사 1993年)
- 金賢子 「フェミニズム的観点から見る韓国現代詩研究」『韓国詩の感覚と美的距離』文学と知性社 1992年。
(김현자 「페미니즘적 관점에서 본 한국 현대시 연구」『한국시의 감각과 미적 거리』문학과지성사 1992年)
- 金賢子 「積極的創造的母性と生の本能のエネルギー」『韓国女性詩学』깊은샘 1997年。
(김현자 「적극적 창조적 모성과 삶 본능의 에너지」『한국여성시학』깊은샘 1997年)

金恵順「フェミニズムと女性詩」『もう一つの文化』第9号 1992年。

(김혜순 「페미니즘과 여성시」 『또 하나의 문화』 제9호 1992년)

金恵順「女性的書き手に対する連想」『文学村』 2000年春・冬号。

(김혜순 「여성적 글쓰기에 대한 단상」 『문학동네』 2000년봄-겨울호)

辛英姫 ほか『母性の談論と現実』羅南出版 1999年。

(심영희 외 『모성의 담론과 현실』 나남출판 1999)

李銀静「肉体、その不和と仲直りのメトリック」『韓国女性メトリック』깊은샘 1997年。

(이은정 「육체, 그 불화와 화해의 시학」 『한국여성시학』 깊은샘 1997)

鄭クッピョル「女性主義的詩の流れと争点」『文学思想』 1999年6月号。

(정끝별, 「여성주의시의 흐름과 쟁점」 『문학사상』 1999년6월호)

鄭英子『韓国女性詩人研究』平民社 1996年。

許英子、韓英玉『韓国女性詩の理解と感想』文学アカデミー 1997年。

(허영자, 한영옥 『한국여성시의 이해와 감상』 문학아카데미 1997年)

韓国女性研究会文学分科編訳『女性解放文学の論理』創作と批評社 1990年。

(한국여성연구회 문학분과 편역 『여성해방문학의 논리』 창작과비평사 1990年)

チャン・ピルファほか著 西村裕美編訳『韓国フェミニズムの潮流』明石書店 2006年4月。

佐川亜紀『韓国現代詩小論集』土曜美術社出版販売 2000年12月。